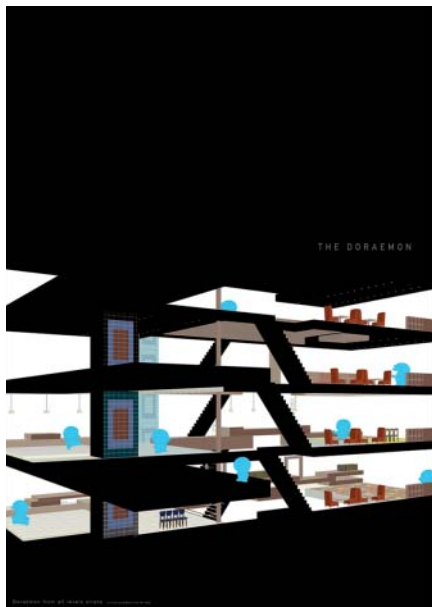


教員は語る

第二回

芸大への期待・抱負・提言



「ドラえもん展」 / 2002年 / CL THEドラえもん展製作委員会 / AD松下計 / D松下計 / I松下計 / Fujiko-pro & Matsushiko Kei 2002

松下計

助教授 デザイン科（視覚・伝達）

藤本隆文

助教授 器楽科（打楽器）

デザイン、打楽器と芸大の立ち位置

松下 デザインという領域は、長く数えると二千年という考え方もありますが、短くとらえるとまだ二百年くらいの歴史しかないのです。ですから解釈が今も進んでいるのでほとんど専門細分化されているというところでしょうか。

デザインの解釈が常に更新されていて、だんだん本質化に向かうほうには行っています。ただ、地球全体で見たデザインシーンのなかの日本の立ち位置と、日本における芸大の立ち位置というの

は非常に相似形をしている。それはどうということかという、造形性を重んじていくということなんです。われわれの業界では、必ずしも絵画を見るような視線や、彫刻を見るような視線だけでデザインをはかるわけではない。デザインというのは計画そのもの、提案そのものです。造形性を重んじてデザインというものを語る日本独自の立ち位置があって、日本全体のなかでも芸大がそのコアで、いちばん強いところなんです。これはわれわれの重要な武器なのでこの足場を崩さないということが必要かもしれません。もちろん「造形性」という言葉の意味も広がっていることを理解したうえでです。





「Design News 261号 リニューアルExhibition」 / 2003年 / CL 日本産業デザイン振興会 / AD松下計 / D田辺智子 / P松本理加 / CD山田裕一



藤本 松下さんが今おっしゃっていたことと実によく似ていて、打楽器が独自に何か動き出した歴史というのは、百年にも満たないのです。打楽器が独立して主張し出したのは、二十世紀に入ってからなんです。それまでは、オーケストラの脇役だったわけで、歴史が始まったばかりの、今まさに混沌とした状態なんです。だから、変化し続けている真つ最中というところですね。

それと同時に、やっぱり細分化の空気というのは、音楽の世界でもあります。そうすると、もう専門的にどんどん狭いとらえ方をする人が、やっぱり多くなってきていて、少し離れた位置から、感じたり聞いたりする姿勢というのがだんだん少なくなっています。

そんななかで、芸大は、やはり突出しているとともに少し特殊な場所だと思っんです。都内にあるほかの音楽学校を見ても、専門学校的というの、細分化を歓迎する傾向があります。例えば、オーケストラプレイヤーを養成するコースがあったり、打楽器科でもいくつかに分けて、その道のエキスパートを育てて即戦力をつくらうとしていたり。私学ですから、実績が出せる方向に行くのは当然のことです。芸大にそれがないかといえ、そういうわけではないのですけれども、打楽器の

特殊性がもしれないのですが、打楽器の窓から外を見ると、というスタンスを持てる唯一の学校だと僕は思っんです。

打楽器という楽器は、あまりにも漠然としたジャンルなんです。もともと西洋音楽のなかの打楽器というのは、民族音楽の味つけとか香りづけみたいな役割だったのです。だから、楽器の性質上、結局自分のいるところ、何かするということよりも、自分の外で何が行われているか、というのを知る姿勢がないとやっていけない。それがほかの楽器との圧倒的な違いなんです。そういう視点を持てる日本では唯一の学校ではないかと、僕は思っています。

交流への意欲

松下 美術学部のなかで、建築科とデザイン科だけが、制作したものがシミュレーションなんですね。日本画、彫刻科や工芸科の学生は、どんな作品であっても本物ですが、デザイン科のつくる作品というのは、例えば電話のデザインをしたとしても、それはかけられる電話ではないんです。ポスターをつくっても、それを刷って町に貼るわけじゃない。だから、作品を同じ土俵へ持つてき

松下計（まつした・けい）

一九六一年神奈川県生まれ。

一九八五年東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。

一九八七年東京芸術大学大学院美術研究科ビジュアルデザイン専攻修了。

一九九〇年松下計デザイン室設立。

東京芸術大学美術学部非常勤講師を経て、二〇〇四年より助教授。

て相撲をとらせると、それは負けるに決まっているのです。われわれの本質は、提案なんですよ。電話やポスターが製品ではなくて、情報そのものが作品なわけです。その意味では先端芸術表現科と共有している部分がある。自分たちの立ち位置を社会に配置することが仕事の一部なのです。

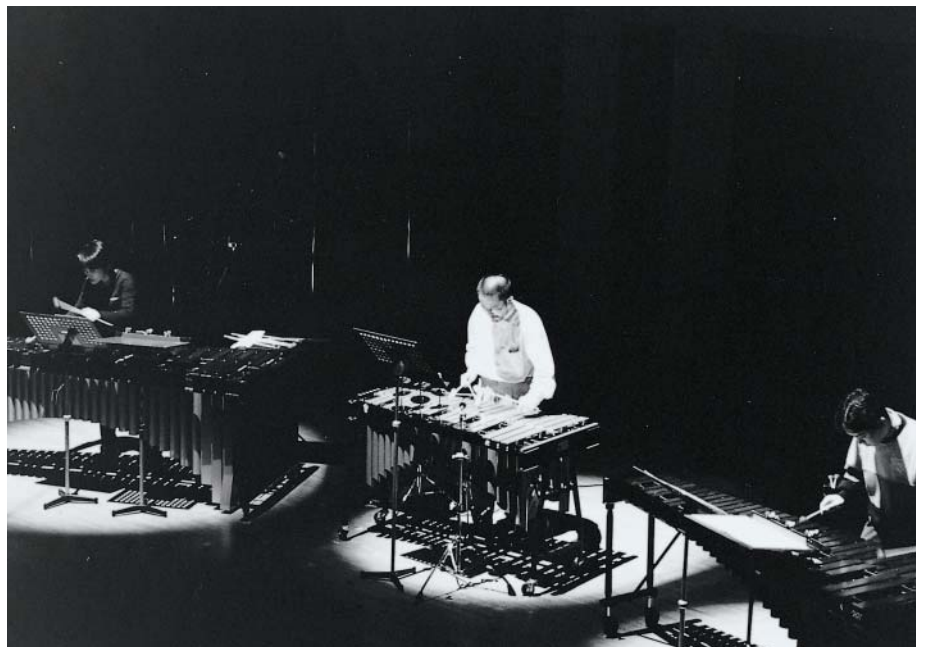
藤本 芸大のなかで、ほかの先生方との共同作業というところあまりないですよ。打楽器の場合、弦楽器の先生方とか管楽器の先生方と同じオーケストラと一緒に演奏するとか、あるいは何かアンサンブルで一緒になったりすることは楽器の性質上あるのですが、でもそのくらいです。それでも、洋楽同士はかなりつながりがあると思うのですが、この学校は邦楽科があるでしょう。邦楽と洋楽の接点というのはあまりないですね。

僕はこの学校にお世話になることになって、いちばん楽しみだったのは、邦楽科の先生と何か接触がとれるんじゃないかということだったのです。全く未知の世界だから。邦楽離子という、いわゆる邦楽の打楽器のセクションがあります。でも全く交流がないのです。コンテンポラリーをやる人間にとっては邦楽器、邦楽のハードでもソフトでもすごく興味のあるところのはずなのに、全然お互いにやりとりがなかったらしいというのはもったいないなと思って。お互いにすごく刺激になることが山ほどあるはずだと思います。僕は今からなるだけ邦楽科の先生のところ遊びに行きたいと思って楽しみにしています。

共同作業の可能性

藤本 打楽器のコンテンポラリーな、いわゆる現代音楽と呼ばれるジャンルの曲には、聴覚だけで

はなくて視覚的な要素も非常に大きいんです。ほかの楽器に比べて運動性があるのと、楽器そのものの見た目に特徴があつて、同じ曲なのに、人によって組み合わせ方とか楽器の色であるとかが全部違う。そういうところに個性が出てきたりするわけですけど、ほかの楽器よりも打楽器のほうが道路の向こう側（美術学部）に近いような気がします。何か共同作業ができるとしたら、いちばん可能性が高い楽器は、実は打楽器ではないかと思



藤本隆文の演奏風景。1999年カザルスホールにて

うんです。

松下 そういうことができるといいですね。デザインにはいろいろなものをつないでいく仕事があるので、本当はわれわれが音頭をとってもいいことなんですよ。

藤本 昔、チェンバロ奏者で、リサイタルのときチェンバロの胴体に、いろいろな画家の人に何か描いてもらうという人がいました。演奏する作品を、事前に聴いてもらって、イメージをつくって

もらう。会場全体を、音と視覚の共同でつくっていくというコンサートをなさっている方もいました。音だけじゃなくて、視覚的要素が入ることで、全く聴こえ方が変わってくるから、絶対おもしろいと思います。

松本 そうですね。やっぱりわれわれがやっている仕事というのは、基本的には全体価値だと思いますので、スポーツ的に見るということではないと思います。芸大という場所はやっぱり総合的にできる唯一の環境がもしませんか。

感動の差異を埋める

松本 デザインの世界では、細分化が進んでいる一方で、深化もしているということも事実なのです。まず、そういうものを大きく捉えて、本質というのは簡単につかめるものではないのですけれども、そういうまなざしを持つということを、僕は多くの人と共有したいと思っています。

デザインの本質は文化と言ってもいいのですが、オペラを観たり、額縁に入った絵を鑑賞することでも文化だけでも、生活そのものが文化なんですよ。要するに、カルチャーというのは耕すという意味ですから、生きていく営みそのものが文化

なのです。だから、われわれはそこにも目を向けていかなければいけないので、周りを完全に静寂に押さえつけて、有利な立ち位置からデザインを語らないようにしないとイケない。もっと広くデザインを考えていくべきだと考えたいのです。

藤本 実技系の科の学生は、ともすると演奏だけになってしまいます。特に打楽器は、民族音楽をはじめとして、ほかの専門教養を疎かにして、実技だけやっていけばいいという時代ではないと思う。とくに芸大はそういう学校じゃないと思いますし。だから、僕は学生には、おもしろそうな授業があれば受けに行きなさいというふうと思っています。そういう姿勢を学生に持ってほしいし、そういう雰囲気にしたいです。教養科目で身につけた知識や刺激も必要ですし、例えば小泉文夫先生の資料室にある楽器の半分は打楽器ですから。そういう流れを知ると知らないのでは演奏が絶対変わらぬと思うんです。自分の楽器の外に出て、いちばん手指の伸びそうな邦楽もやるといふふうになつてもらいたいですね。それを学生にどんどん促していきたい。

松本 ちょっと状況が似ていますね。

藤本 さっきからお話を伺っていると、そんなんですよ。結局、演奏に戻ってきて、狭いものに

なってしまうので、そういう環境づくりを少しずついいから進めたいなと思います。それには、まず何より教員自らが乗り込んでいって、恥をかいて帰ってこよつと思っているわけですね。

松本 言われてみれば、どうして音楽学部と交流がないのだろうと思いますね。

ただ僕らは、提案や計画をやるもので、体を使って表現する人たちに対して、やっぱりある種のジェラシーがあるんですよ。例えば、僕が若いころはカメラマンなんか、シャッターを押すだけでお金になるいい仕事だなと思っていましたけれども、でも一瞬を捉えないといけないし、撮れなかったではすまされない世界ですよ。同じように音楽をなさっている方が、その瞬間に表現し披露するというのは、ちょっとかなわないという感じがありました。

ですから、われわれがつくろうとしている感動と、音楽をやられている方たちの感動の差異みたいなところをつまぐ埋め合わせていかないと、そこで直ちに共有できるというほど簡単じゃないわけですね。自分のやっていることに対しては近視眼的に向き合っわけですが、価値は全体としてあるんだということを、まず共有することが大事なんじゃないでしょうか。



藤本隆文（ふじもと・たかふみ）

一九六五年東京都生まれ。

一九八七年東京音楽大学音楽学部器楽科卒業。

一九九三年神奈川フィルハーモニー管弦楽団ティンパニー奏者。

二〇〇三年同管弦楽団首席ティンパニー奏者。

東京芸術大学音楽学部非常勤講師を経て、二〇〇四年より助教授。